

論文

# コールリッジとユニテリアン主義：初期の宗教思想に焦点を当てて

## Coleridge and Unitarianism: Focusing on his Early Religious Beliefs

江口 誠<sup>1)</sup>

Makoto Eguchi

### ■Abstract

The main purpose of this paper is to examine possible influences of William Frend and Joseph Priestley upon Samuel Taylor Coleridge. Coleridge was born and raised Anglican; however, he went deeply into Unitarianism after he entered Jesus College at Cambridge University. It will be pointed out that, in the midst of the ideological conflict after the outbreak of the French Revolution, he seems to have been influenced by some non-conformist and liberal figures around him, including Frend, and by such atmosphere at Jesus College at that time. In addition, Coleridge seems to have been influenced by Priestley's Unitarian thoughts, too, for Coleridge's attitude to Orthodoxy is quite similar to Priestley's. He revered the clergyman, philosopher and chemist so much that he composed a sonnet dedicated to him.

The last part of this paper examines some excerpts from *Biographia Literaria*, an autobiography by Coleridge, in order to find out how and when he began to believe in Unitarianism, and why he eventually departed from it. It will also be pointed out that, after struggling to understand Christianity in his own way, he found his own answer.

キーワード：コールリッジ、ユニテリアン主義、ウィリアム・フレンド、ジョーゼフ・プリーストリ、非国教徒

**Key Words:** Samuel Taylor Coleridge, Unitarianism, William Frend, Joseph Priestley, dissenter

### 1. はじめに

イギリス・ロマン派詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) は、1772年10月にイングランド南西部デヴォンシャー州オタリー・セント・メアリーで生まれている。彼の父ジョン・コールリッジ (Rev. John Coleridge, 1718-1781) は、ヘンリー8世が創設したグラマースクールの校長であり、英国国教会の教区牧師でもあった。しかし、1781年10月に父が急逝すると、若きコールリッジはロンドン市内の英国国教会系パブリックスクールであるクライスト・ホスピタル (Christ's Hospital) に入学する。つまり、彼は生まれてから一貫して英国国教会の影響を強く受けたことになる。そして、そこで彼の生涯の友となる作家チャールズ・ラム (Charles Lamb, 1775-1834) に会おう。<sup>1)</sup>

1791年、コールリッジはケンブリッジ大学のジーザス・コレッジ (Jesus College) に入学する。しかしながら、ケンブリッジに到着した同年10月から数ヶ月後、敬愛する英国国教会牧師の兄ジョージ・コールリッジ (George Coleridge, 1764-1828) に宛てた1792年1月24日付の書簡で、以下のように述べている：「正統派」などとおどけて呼ばれているあの信仰の暴食を尊重するに十分な慎重さをまだ持ち合わせています」(“I have yet *prudence*

enough to *respect* that *gluttony of Faith* waggishly yclept Orthodoxy”)。<sup>2)</sup>つまり、既にこの頃には、コールリッジの中では正統派キリスト教に対する疑問が芽生え始めていることが見て取れる。そしてその頃から、彼はユニテリアン主義 (Unitarianism) へと傾倒していく。

ところが、この正統派キリスト教への疑問を持ち始めた頃から約6年後、同じく兄のジョージに宛てた1798年3月10日付の書簡では、コールリッジは以下のように述べている：「罪 (の意識) については何も言うことはありません；しかし、断固として私は原罪を信じます」(“Of GUILT I say nothing, but I believe most steadfastly in original Sin”)。<sup>3)</sup>これらの言葉から、再び彼のキリスト教に対する信念が再び大きく変容していることが窺える。なぜなら、「原罪を信じる」ということは、即ち原罪を認めない立場をとるユニテリアン主義を捨て去ったことを意味するからである。

そこで本論では、まず当時の時代背景やイデオロギー対立を考慮しつつ、彼に影響を与えたと思われる人物に注目しながら、1792年頃から1798年頃までの間にコールリッジに生じた宗教的な思想の変遷の過程を辿る。さらに、その思想の変遷に関係すると思われる彼の詩、思想や回顧録を取り上げ、彼の宗教への姿勢及び信念について考察することで、今後のさらなる研究の方向性を見定めたい。

1) 近畿大学産業理工学部 教養・基礎教育部門 教授 eguchi@fuk.kindai.ac.jp

## 2. ウィリアム・フレンド

兄への書簡の中で正統派キリスト教への不信感を表した1792年初頭は、コールリッジがケンブリッジ大学のジーザス・コレッジに入学した直後であり、それは父と同じく教区牧師になるためであった。そしてその際に、同コレッジのフェローであり、さらにユニテリアン (Unitarian) でもあったウィリアム・フレンド (William Frend, 1757-1841) の影響が少なからずあったと考えられる。<sup>4</sup> フレンドには、その当時宗教観に関する悪評があり、ケンブリッジ大学のチューター職を解かれ、その後、1793年に英国国教会の礼拝を痛烈に批判した内容のパンフレット (*Peace and Union recommended to the Associated Bodies of Republicans and Anti-republicans*) を執筆したことが契機となり、ついには大学から追放されてしまう。従って、フレンドによるユニテリアン主義の影響を心配していた兄ジョージに対して、コールリッジは正統派キリスト教の信仰の保持を伝えることが、この書簡の目的であったと推測できる。当時のケンブリッジ大学のジーザス・コレッジは、いわゆる左派的な思想の動乱の真只中であり、ユニテリアンであることは、少なくともフランス革命の熱心な支持者であり、かつ貴族や英国国教会への敵であることと同義であった。<sup>5</sup> また、1790年にはエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797) がフランス革命及び国内の革命勢力を痛烈に批判した政治パンフレット『フランス革命の省察』 (*Reflections on the Revolution in France*) を、翌1791年にはトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) が、そのバークの主張に呼応する形でフランス革命を擁護する立場を表した『人間の権利』 (*Rights of Men*) の第一部を、さらに翌1792年には第二部を発表しており、まさにフランス革命期のイギリス国内におけるイデオロギー対立の最中にコールリッジはケンブリッジ大学に入学したことになる。

1770年代から1780年代には、フレンドを含む多くの非国教徒と改革論者がこのジーザス・コレッジと関連があったことが判明している。<sup>6</sup> 因みに当時大学図書館から本を借りるためには、チューターに代表されるシニア・メンバーへの貸借依頼が必要だったようであり、不完全ながらもフレンドがコールリッジのために借りた書籍のリストが存在する。<sup>7</sup> もちろん、それによって具体的にコールリッジに宗教的もしくは政治的にどのような影響をもたらしただのか、という点については明らかにはなっていない。<sup>8</sup> 結局のところ、コールリッジは、学位を取得することなく、1794年12月にケンブリッジ大学を去っている。

ウィリアム・フレンドは、1795年までジョン・カートライト少佐 (John Cartwright, 1740-1824) によって創設された、議会・選挙改革を目的とする政治改革団体「憲法情報

教会」 (Society for Constitutional Information、以下SCI) のメンバーでもあった。このSCIは、18世紀末イギリスにおいて、最も有名かつ影響のあった急進的な協会の一つであり、そのメンバーのほとんどはロンドン近郊在住の教養のある中流階級に属する改革者で構成され、後の有名なロンドン通信協会 (London Corresponding Society、以下LCS) へと繋がっていく。<sup>9</sup> ただし、SCIは総体として合理的非国教会主義 (Rational Dissent) の意見を代表するには不十分であったため、ロンドン在住のユニテリアンの多くは加入していなかったようである。<sup>10</sup> いずれにせよ、ウィリアム・フレンドや多くのユニテリアンと深い関係にあったケンブリッジ大学ジーザス・コレッジの環境に由来する直接的及び間接的な影響により、恐らくその頃からコールリッジは思想的にユニテリアン主義に接近していったのではないかと推測される。

ここでユニテリアン主義について確認しておきたい。ユニテリアン主義とは、「三位一体に反対し、神の単一性 (unity) を主張し、イエスの神性を否定する教派およびその主張」である。<sup>11</sup> イギリスでは、17世紀に三位一体、キリストの神性、聖霊の神性、キリストの贖罪と原罪の教義の否定が強調されたソツィーニ派 (Socinianism) の『ラコウ教理問答集』 (Racovian Catechism) の改訂版が広まった。その反三位一体の考えは、例えばジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) にも大きな影響を与え、18世紀初頭には、キリストの神性という命題に関して、英国国教会内部にも大きな影響を与えていた。キリストは神と同等ではなく従属する存在であると主張し、325年のニカイア公会議 (the Council of Nicaea in 325) 以降は異端とされたアリウス主義 (Arianism) の信奉者についても、広い意味ではユニテリアンに含まれる。<sup>12</sup> また、当時のイギリスのユニテリアンらは、英国国教会信者のみが公職に就けることを定めた「審査法」 (Test Act 1673) や「自治体法」 (Corporation Act 1661) の撤廃、議会改革、奴隷貿易の廃絶と報道の自由の4つの大義を掲げていた。<sup>13</sup>

## 3. ジョーゼフ・プリーストリ

1794年12月11日付の『モーニング・クロニクル』誌 (*Morning Chronicle*) の中で、コールリッジは、ジョーゼフ・プリーストリ (Joseph Priestley, 1733-1804) に捧げるソネットを発表している。このソネットは、1794年12月1日から1795年1月31日までの『モーニング・クロニクル』誌に掲載された合計11人への「著名人に捧げるソネット」 (*Sonnets on Eminent Characters*) シリーズの中で、ホン・アースキン (Thomas, Erskine, 1st Baron Erskine, 1750-1823)、エドモンド・バークに続く3人目の人物とし

て登場するものである。<sup>14</sup> これらの3名を含め、この一連のソネットで扱われているのは、いずれも当時政治的に影響力があった人物であり、例えばコールリッジ自身が後の1796年に発行することになる『ウォッチマン』誌 (*The Watchman*) のタイトルは、熱烈なホイッグ党の支持者であったホン・アースキンのスピーチに由来しているという説がある。<sup>15</sup> コールリッジが、当時急進的な新聞であった『モーニング・クロニクル』誌以外にも、『ケンブリッジ・インテリジェンサー』誌 (*Cambridge Intelligencer*) や『テレグラフ』誌 (*Telegraph*) などの新聞や雑誌に投稿した理由は、もちろんイデオロギー的な側面もさることながら、それに加えてウェールズへの徒歩旅行の代金を稼ぐために、『マンスリー・マガジン』誌 (*Monthly Magazine*) に自身の詩『老水夫の歌』(*The Rime of the Ancient Mariner*) を売り込む意図があったためではないかとも考えられている。<sup>16</sup> 以下、このプリーストリに捧げられたソネットとその日本語訳を引用する。

# SONNET: TO PRIESTLEY

Tho' rous'd by that dark Vizir RIOT rude  
Have driven our PRIESTLEY o'er the Ocean swell;  
Tho' SUPERSTITION and her wolfish brood  
Bay his mild radiance, impotent and fell;  
Calm in his halls of Brightness he shall dwell! 5  
For lo! RELIGION at his strong behest  
Starts with mild anger from the Papal spell,  
And flings to Earth her tinsel-glittering vest,  
Her mitred state and cumbrous pomp unholy;  
And JUSTICE wakes to bid th' Oppressor wail 10  
Insulting aye the wrongs of patient Folly;  
And from her dark retreat by Wisdom won  
Meek NATURE slowly lifts her matron veil  
To smile with fondness on her gazing son! 17

## ソネット——プリーストリーに寄せて

あの暗愚な宰相によって引き起こされた粗暴な暴動が  
我らのプリーストリーを大洋のうねりの上に駆り立てた—  
迷信とその貪欲な子供たちが  
柔和な、無力で残忍な輝きを発した—  
彼を輝く広間に静かに住まわせてやろう！ 5  
何故なら、ほら！ 彼の強力な命令で宗教が穏やかな怒  
りを抱き  
教皇の呪文からはっと目を覚まし

彼女の金ぴかの輝く外衣、彼女の司祭冠を授けられた地位と  
厄介な不浄な華麗さを大地に投げ捨てる—  
そして、正義が目覚め、迫害者に気長な愚行の誤りを 10  
常に侮辱することを泣き悲しむように命じる—  
知恵によって勝ち得た彼女の薄暗い奥まった所から  
柔和な自然が慈しみをもって彼女の見つめる息子に  
微笑みかけるために既婚婦人のパールを持ち上げる。<sup>18</sup>

酸素を発見したことでも知られているジョーゼフ・プリーストリは、イギリスにおけるユニテリアン主義を確立したと言っても過言ではない人物である。しかしながら、非国教徒に対する反感から、1791年の7月に勃発した、いわゆる「バーミンガム暴動」(*The Priestley Riots* もしくは *Birmingham Riots of 1791*) によって、彼の自宅や関係する教会などが次々と暴徒に襲撃され、焼き討ちに遭っていた。そのため、プリーストリはイギリスを離れ、結局アメリカへと脱出せざるを得なくなったのである。ソネット1行目及び2行目はその一連の出来事への言及であり、彼の険しい前途が「大洋のうねり」(*“the Ocean swell”*) というイメージによって表現されている。<sup>19</sup>

注目すべきは、6行目から9行目で、擬人化された「宗教」(*“RELIGION”*) が、プリーストリの命により「ローマ教皇の呪文」(*“the Papal spell”*) という少々過激な表現によって象徴される形式的に華美な信仰形態から脱却する、というイメージである。そして、もちろんそこには形式的にはカトリックの儀式に近い英国国教会からの脱却も意図されていると考えてもよいと思われる。プリーストリは、常に穏やかなイメージで表現されている一方で、彼を敵視する政府や伝統的なキリスト教は、対照的に粗暴さや華美な装飾なイメージで表現されていることが分かる。

さらに、1794年12月末頃から1797年の7月頃まで断続的に執筆し、さらに修正を加えたと考えられる「宗教的瞑想」(*“Religious Musings”*) にも、プリーストリの名前が登場する。

... Pressing on his steps  
Lo! PRIESTLEY there, Patriot, and Saint, and Sage:  
Him, full of years, from his lov'd native land  
Statesmen blood-stain'd and Priests idolatrous  
By dark lies mad'ning the blind multitude 375  
Drove with vain hate. Calm, pitying he retir'd,  
And mus'd expectant on these promis'd years. 20

ほら！自らの足取りを推し進めながら  
愛国者、聖人、賢人なるプリーストリーがそこに—

長き歳月にわたり、血に染まった政治家たちと  
陰險な嘘によって盲目の群衆たちを狂わせる  
偶像崇拜する聖職者たちが彼の愛する故郷から  
空しい憎悪でもって彼を追い払った。静かに哀れに思い  
彼は退却し、これらの約束された歳月を予期して沈黙した。<sup>21</sup>

375

ここでも、上記ソネットと同じように、政治家や伝統的な教会の聖職者らによって祖国を追われることになったプリーストリのイメージが対照的に描写されていることが分かる。

ではコールリッジがソネットとして献詩し、さらに別の長編の宗教詩（政治詩）にも登場するほどまでにプリーストリに魅せられた理由は何だろうか。彼が1795年にプリーストルで行った一連の講演「啓示宗教、その墮落と政治的意見についての講義」(*Lectures on Revealed Religion, Its Corruptions and Political Views*) の中にその理由の一端を垣間見ることができる。恐らく1795年6月5日に行われたであろう5回目の講義の案内には、「キリスト教の墮落」(“The Corruptions of Christianity”) とあり、題目だけをとっても、プリーストリが1782年に出版した『キリスト教の墮落の歴史』(*An History of the Corruptions of Christianity*) の影響を受けたことは明らかである。<sup>22</sup> さらに、この5回目の講演の冒頭で、結果としてこれまでキリスト教社会の信用を失わせた全ての秘儀、詐欺、そして迫害全てを作り出したのはグノーシス派の教義であると糾弾する。<sup>23</sup> そしてこのコールリッジの主張についても、プリーストリの影響を色濃く受けていることが分かる。なぜならプリーストリは、1786年には、『キリスト教の墮落の歴史』に続いて、さらに正統派キリスト教への批判を展開する『イエス・キリストに関する初期の意見の歴史』(*An History of Early Opinions Concerning Jesus Christ, Compiled from Original Writers, Proving that the Christian Church was at First Unitarian*) を出版しており、その第1巻の第3章で、同じようにキリスト教グノーシス派の主張を取り扱っているからである。

#### 4. 『文学的自叙伝』

コールリッジは、1817年に2巻からなる『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*) と題された文芸批評的な自叙伝を出版しており、その中でユニテリアンや三位一体に言及している箇所が複数ある。とりわけ注目すべきは、その第1巻の第10章であろう。章の説明には、「宗教と政治における筆者の主張の進展」(“the progress of his opinions in religion and politics”) という文言が含まれている。ケンブリッジ大学ジーザス・コレッジを去り、周囲から

『ウォッチマン』誌の出版を期待されていた頃の過去の自分自身の宗教観について回顧しながら、彼は以下のように述べている：

... I was at that time and long time after, though a Trinitarian (i.e. ad norman Platonis) in philosophy, yet a zealous Unitarian in Religion; more accurately, I was a *psilanthropist*, one of those who believe our Lord to have been the real son of Joseph, and who lay the main stress on the resurrection rather than on the crucifixion. O! never can I remember those days with either shame or regret. For I was most sincere, most disinterested! My opinions were indeed in many and most important points erroneous; but my heart was single.<sup>24</sup> (下線部筆者)

… 私はその頃そしてその後も長い間、哲学的には（即ちプラトンによれば）三位一体論者でしたが、宗教的には熱心なユニテリアンでした；もっと正確には、私はサイランソロピスト、つまり主キリストはヨセフの本当の息子であり、十字架上で死んだことよりも、復活したことに重きを置いていると信じる者たちの一人でした。ああ、決して私は恥や後悔などといったものでこの頃を思い出すことはありません。というのも、私は非常に誠実で、私欲がなかったからです。私の意見には、確かに多くの、最も重要な点において間違いがありました。ただ、私の心は一つでした。

彼はこの自叙伝を執筆した頃には既にユニテリアンの思想を捨て去っており、「多くの、最も重要な点において間違いがありました」(“in many an most important points erroneous”) という表現にも表れているように、再び原罪や三位一体の考えを信じている彼の立場からすれば、少々批判的な視点からその当時の自己の宗教観を振り返っていることが窺える。<sup>25</sup>

『文学的自叙伝』第2巻の第24章、つまり結論の最後の箇所でもコールリッジはユニテリアンに言及しており、上述の“Psilanthropism” と対をなす信条として“Theanthropism” を提示している。以下に、該当箇所を引用する。

With regard to the Unitarians, it has been shamelessly asserted, that I have denied them to be Christians. God forbid! ... —But this I have said, and shall continue to say: that if the Doctrines, the sum of

which I believe to constitute the Truth in Christ, be Christianity, then Unitarianism is not, and vice versa: and that, in speaking theologically and *impersonally*, i.e. of PSILANTHROPISM and THEANTHROPISM as schemes of Belief, without reference to Individuals, who profess either the one or the other, it will be absurd to use a different language as long as it is the dictate of common sense, that two opposites cannot properly be called by the same name. I should feel no offence if a Unitarian applied the same to me, any more than if he were to say, that 2 and 2 being 4, 4 and 4 must be 8.<sup>26</sup> (下線部筆者)

紙幅の都合上、引用箇所全訳については割愛するが、最も注目すべきは、「キリストの真理を構成していると私が信じているその総体の教義がキリスト教であるとすれば、ユニテリアン主義はキリスト教ではないし、その逆もまた然りである」(“if the Doctrines, the sum of which I believe to constitute the Truth in Christ, be Christianity, then Unitarianism is not, and vice versa”)という箇所であろう。即ち、コールリッジはユニテリアン主義とキリスト教とを峻別しており、彼によれば、それぞれ、キリストを単なる人間と捉える“Psilanthropism”及びキリストは神と一体化していると捉える“Theanthropism”として、互いに対立した全く別の教義(“two opposites”)として理解すべきであるという。さらに、キリスト教の体系は理性と調和しており、理性が見知できる領域の先には信仰がその領域を引き継いでいるのだ、と主張して自叙伝を締め括っている。<sup>27</sup>

## 5. 最後に

以上、本論では1790年代から1800年代初頭にかけてのコールリッジの宗教観の変化、即ちユニテリアン主義への傾倒から、正統派キリスト教への回帰に到るまでの経緯について、当時の政治的・思想的な時代背景というコンテクストを踏まえつつ概観してきた。彼の当時の詩や書簡からは、ウィリアム・フレンドとジョーゼフ・プリーストリの思想、さらにはその時代特有の反体制的なイデオロギーから多大な影響を受けたと思われる形跡が見て取れた。さらに『文学的自叙伝』からは、自分自身の揺れ動いていた過去の宗教観を客観的に振り返り、結局のところは正統派キリスト教の教義へと回帰していった経緯を辿ることができた。

しかしながら、本論では、必然論者(Automatism)という点においてプリーストリの思想に影響を与えたとされるデイヴィッド・ハートリー(David Hartley, 1705-1757)

を含め、フレンドやプリーストリによる影響についての精緻な検証は行っていない。また、コールリッジが『文学的自叙伝』で言及している理性と宗教の関係についての詳細な考察も行っていない。従って、これらの点については、今後の研究課題としたい。<sup>28</sup>

(本研究はJSPS科研費21K00355の助成を受けたものです。)

## 注

- 岡本昌夫、『コールリッジ評伝と研究』。(京都：あぼろん社, 1965) 1-2.
- Coleridge, Samuel Taylor, *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, Vol. 1, Ed. Earl Leslie Griggs. (Oxford: Clarendon Press, 1956) 20.
- Coleridge, *Collected Letters*, 396.
- Coleridge, *Collected Letters* 20.
- Wiley, Basil, “8: Coleridge and Religion,” S. T. Coleridge, Ed. R. L. Brett. (London: G. Bell & Sons, 1971) 223.
- Roe, Nicholas, *Wordsworth and Coleridge: The Radical Years*. (Oxford: Clarendon Press, 1988) 85.
- Mays, J. C. C., “Coleridge’s Borrowings from Jesus College Library, 1791-94,” *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society* 85 (1985): 557-81.
- 例えばE. K. Chambersは、フレンドの影響が多分にあったことは疑いないと主張する：*Samuel Taylor Coleridge: A Biographical Study*. (Oxford: Clarendon Press, 1938) 18. しかしながら、Wileyは多くの伝記作家がこの時期のウィリアム・フレンドによるコールリッジへの多大な影響について論じているが、フレンドやケンブリッジ大学のジーザス・コレッジの雰囲気のみならず、「改革の時代に吹いた教義の卓越風」(“a prevailing wind of doctrine in a revolutionary era”)のようなものとしてユニテリアン主義がコールリッジに影響を与えたのだと論じている(225)。
- Dickinson, H. T., “Society for Constitutional Information (act. 1780-1795).” *Oxford Dictionary of National Biography*. 24. Oxford University Press. Date of access 23 Apr. 2023, <<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-42306>>
- Smith, Valerie. *Rational Dissenters in Late Eighteenth-Century England*. (Woodbridge: The Boydell Press, 2021) 135.
- 赤司道雄、「ユニテリアン」、『キリスト教大事典』、改訂新版。(東京：教文館, 1970) 1087.
- ヨーロッパ及びイギリスに於けるユニテリアン主義の歴史については、以下の拙論を参照のこと：江口誠、「イギリスにおけるユニテリアン主義：プリーストリに焦点を当てて」、『カルチュラル・グリーン』3 (2022) : 3-21.
- Holmes, Richard, *Coleridge: Early Visions*. (New

York: Viking, 199) 96.

- <sup>14</sup> コールリッジは1794年12月11日にサウジーに宛てた書簡で、「既に10を書き上げ、さらに6つ書くつもりだ」と語っているため、当初は合計16のソネットを創作する想定であったと思われる (Coleridge, *Collected Letters*, 137)。
- <sup>15</sup> Courtney, Winifred F., “Watchman, The,” *British Literary Magazines: The Romantic Age, 1789-1836*. Ed. Alvin Sullivan. (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1983) 419.
- <sup>16</sup> Esterhammer, Angela, “Coleridge in the Newspapers, Periodicals, and Annuals,” *The Oxford Handbook of Samuel Taylor Coleridge*, Ed. Frederick Burwick. (Oxford: Oxford UP, 2009) 167.
- <sup>17</sup> Coleridge, Samuel Taylor, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Poetical Works I Poems (Reading Text): Part 1*, Ed. J. C. C. Mays. (Oxford: Princeton UP, 2001) 157-8. 後に *Poems on Various Subjects* (1796) に収録された際には、詩の表現に一部手直しを加えられているようである。
- <sup>18</sup> サミュエル・テイラー・コールリッジ, 『S. T. コールリッジ詩歌集 (全)』, 野上憲男訳. (大阪: 大阪教育図書, 2013) 100. この翻訳では「プリーストリー」と表記されているが、本論では「プリーストリ」という表記で統一している。
- <sup>19</sup> ソネット3行目冒頭の “Bay” は *OED* によれば「～に吠える、吠えて襲う」の比喩的表現 (“3. a. *transitive*. To bark at, to assail with barking. / b. *figurative* of persons.”) とされており、この箇所が初出の項目として掲載されている: “bay, v.1.” *OED Online*, Oxford University Press, March 2023, [www.oed.com/view/Entry/16392](http://www.oed.com/view/Entry/16392). Accessed 28 April 2023. であれば、2行目 “wolfish” と3行目 “Bay” のイメージが一致するため、「彼の穏やかな輝きに吠えた」と解釈すべきだと思われる。
- <sup>20</sup> Coleridge, *Poetical Works*, 189.
- <sup>21</sup> コールリッジ, 『S. T. コールリッジ詩歌集 (全)』, 120.
- <sup>22</sup> プリーストリの『キリスト教の墮落の歴史』の内容については、上記拙論「イギリスにおけるユニテリアン主義: プリーストリに焦点を当てて」を参照のこと。
- <sup>23</sup> Coleridge, Samuel Taylor, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Lectures 1795 On Politics and Religion*, Eds. Lewis Patton and Peter Mann. (Cambridge: Routledge & Kegan Paul, 1971) 195-202.
- <sup>24</sup> Coleridge, Samuel Taylor, *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, Volume 7: Biographia Literaria*, Ed. James Engell and W. Jackson Bate. (Princeton: Princeton UP, 1983), Vol.1, 179-80.
- <sup>25</sup> コールリッジがここで使っている “psilanthropist” という語については、*OED* には “psilanthropism” としての定義 “The doctrine of belief that Jesus was a mere man” 「キリストは単なる人間であったという信仰の信条」という説明の後に、その派生形として定義が掲載されており、“a person who holds the doctrine of psilanthropism” 「“psilanthropism” の信条を抱く者」という説明がある。“psilanthropism” では1811年頃に

*Marginalia*で、そして1825年に *Aids to Reflection* の中で、さらに “psilanthropist” では1817年に *Blessed are ye that sow beside all Waters!* でそれぞれコールリッジがこの語彙を使用したという引用例が初出として掲載されており、「ただの人間に過ぎない」といった意味を持つギリシャ語 “ψιλάνθρωπος” を元にした彼の造語であると考えられる。“psilanthropism, n.” *OED Online*, Oxford University Press, March 2023, [www.oed.com/view/Entry/153811](http://www.oed.com/view/Entry/153811). Accessed 16 April 2023.

<sup>26</sup> Coleridge, *Biographia Literaria*, Vol.2, 245-6.

<sup>27</sup> Coleridge, *Biographia Literaria*, Vol.2, 247.

<sup>28</sup> 姉の病気を冷静に受け入れる親友チャールズ・ラムを「ユニテリアンのクリスチャンで、人間の機械的動作の支持者」 (“a Unitarian Christian and an Advocate for the Automatism of Man”) と高く評価している。: Coleridge, *Collected Letters*, 147.